

令和 2 年 5 月 27 日現在

機関番号：32660

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K13472

研究課題名（和文）動名詞節の構造と主語内部からの抜き出しに関する研究

研究課題名（英文）A Study of Structure of Gerunds and Extraction out of Subject Phrase

研究代表者

菅野 悟 (Kanno, Satoru)

東京理科大学・理学部第二部教養・准教授

研究者番号：80583476

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、生成文法のラベル理論に基づき、一致現象と抜き出しの関係を明らかにすることである。従来の研究においては、内部からの抜き出しが出来るかどうかは、統語上の位置が重要であるとされた。しかし、本研究では、位置ではなく、どのような一致関係にあるのかが重要であることが示される。

この研究を進めるうえで、主語位置に存在する動名詞節や不定詞節の主語の内部から抜き出しができることに着目する。これらの名詞句は、全部の素性と一致しているのではなく、部分的な一致のみを示す。さらに、これら名詞句から抜き出しができる。この一致特性と抜き出しの関係から本研究の妥当性が示される。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、生成文法の最先端の理論であるレベル理論の観点から、一致現象と名詞句内部からの抜き出しの関係を明らかにすることを目的としている。特に、従来の研究では、主語内部からの抜き出しが出来ないと主張されてきた。しかし、本研究で明らかにされたことをは、統語上の位置が重要なのではなく、名詞がどのような一致関係に入るかが重要である。一般的に名詞句はすべての素性の点で一致関係に入るとされるが、このような一致関係に入らない名詞句も存在する。このような名詞句内部からの抜き出しが可能であることは、抜き出しの可否は一致現象と相関すると言え、本研究を支持するものである。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to reveal the relationship between agreement phenomena and extraction out of DPs in the labeling framework of generative grammar. In previous studies, it has been argued that the (im)possible application of sub-extraction depends on the syntactic positions of DPs. However, the current study has revealed that the way that DPs enter into an Agree relation is more important than their syntactic position in terms of the application of sub-extraction.

The discussion of this study has been based on gerunds in subject positions and subject phrases of infinitival clauses. These types of subjects do not enter into an Agree relation for all of the phi-features, but they only show an Agree relation for a part of the full set of the phi-features. Importantly, it is possible to apply sub-extract operation to these subjects. This co-relation supports the current study.

研究分野：英語学

キーワード：生成文法 統語論 ラベル理論 主語 内部からの抜き出し 不定詞 動名詞

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究は生成文法の最先端の理論である極小主義プログラムの枠組みで研究が行われ、特にラベル付けに焦点が当てられている。生成文法の最初期の研究以来、ラベルという概念が非常に重要視されてきており、この極小主義プログラムにおいて、ラベルという概念が再び注目されている。例えば、最初期の研究では、句構造規則が仮定されており、ラベルが重要な働きをしてきた。それ以降、様々な句構造規則が X バー式形にまとめられることになる。しかし、近年の極小主義プログラムの研究で明らかにされた点は、X バー式形はラベルを規定しているという点であり、また、外延構造が存在するという点である。

(2) 言語の操作として必要不可欠な操作は言語表現を結合させる操作であり、その操作は併合と呼ばれている。従来の研究では、ラベル付けが併合操作に組み込まれてきた。例えば、X バー式形では、併合することにより、範疇素性が投射することが前提とされてきた。また、極小主義プログラムの枠組みであれ、併合の内的操作としてラベル付けが仮定されてきた。

しかし、近年の研究では、併合とは別に独立した操作としてラベル付けが存在すると主張され、この主張により、普遍文法内部の操作に対し、原理的説明を与えることを可能にし、さらに、極小主義プログラムの目標をさらに推し進めることが可能となった。

(3) 併合操作とは別にラベル付けが行われることが仮定されているが、このラベル付けの操作として最小探査によるラベル付けが仮定されている。最小探査の結果として、主要部が見つければ、その主要部がラベルとなる。このため、{X, YP}の併合の場合、ラベルとなるのは、X である。しかし、最大投射範疇の XP と YP が併合操作により併合されるとき、最小探査は X と Y を同時に見つけることになり、ラベルを一義的に決定することが出来ない。このような場合、XP と YP の両方が持つ素性がラベルとなる。このため、XP と YP が φ 素性を共有する場合、XP と YP の集合である {XP, YP} のラベルは、 $\langle \varphi, \varphi \rangle$ となる。

(4) このように、ラベルという概念の重要性が再び認識されるようになり、ラベルを通して言語特性が解明できると期待されている。しかし、最小探査によるラベル付けは近年提案された研究であり、理論的にも経験的にも多くの課題が残されている。

このような理論的背景のもと本研究が開始された。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的として理論的側面と記述的側面の 2 点が挙げられる。理論的側面として、生成文法の中でもラベル理論が再度注目されており、ラベルを中心として理論構築を行う必要がある。本研究の目的の 1 つは、理論的観点での考察を進め、ラベル理論に貢献することが挙げられる。

しかし、近年の生成文法理論において、理論的側面が強調されることが多々あり、記述的側面を軽視されているかのように感じられる場合がある。このため、本研究では、記述的側面も同じように重視する。特に、記述的側面からすると、従来の考えに対する反例となる現象を多く提示することを重視する。

このように、記述的な面を重視し、従来の理論では説明されてこなかった言語資料を提供することを 1 つ目の目的とし、さらに、これらの言語資料をラベル理論の観点から説明すること 2 つ目の目的とする。

(2) 従来までの研究では、主語の位置に生起する名詞句内部からの抜き出しが出来ないと主張されてきた。しかし、この考えに対する反例が観察される。本研究のための予備研究で、主語として生起する名詞句であれ、その名詞句内部からの抜き出しが可能となる事例が多く存在することが挙げられている。このため、これらの事実が記述的な目的を達成するための中心的な働きをする。これにより、有益な言語資料を提供することが出来る。

さらに、これら一見すると反例と考えられる言語現象にラベル理論の観点から説明することを目的とする。このように、説明理論として、ラベル理論を用いることにより、ラベル理論が持つ有用性を示す。これにより、理論的な貢献ができることが予測される。

3. 研究の方法

(1) 本研究は主語位置に生起する名詞句内部からの抜き出しに説明を与えることを目的とする。しかし、このような説明はその場限りのものではなく、普遍文法の観点、及び、人間の諸特性から導かれる原理的に動機づけられたものでなければならない。このため、本研究では、いくつかの下位研究へと分け、それぞれの研究の妥当性を細かく検証することを本研究の方法とする。これにより、記述的にも妥当であり、なおかつ、理論的な貢献を行うことが可能となる。

(2) 本研究を進めるための下位研究を明確にする。まず必要とされる研究は一致操作に関わる研究である。現在、主要な操作として、併合操作のみならず、一致操作が仮定されている。この一致操作はラベル付けにも重要な役割を果たすため、一致操作の研究が不可欠となる。

次に主語句の内部からの抜き出しの研究に取り組む。この研究に取り組む際には、一致操作の

研究成果を十分考慮する。これにより、一致操作と抜き出しに対し、有意義な関係性を観察することが出来る。

さらに、主語内部からの抜き出しに関する研究成果を目的語の抜き出しへと応用できるかどうかを検証する必要がある。特定の現象のみに当てはまる理論は、普遍文法を構成する理論となる可能性は低い。このため、より一般的な現象へと拡張できるかどうかを常に検証する。

また、本研究では、動名詞節や不定詞節などの節構造のラベル付けの研究と関わるものであり、また、述部がステージレベルか個体レベルであるか、などの意味的な側面ともかかわる。これらの意味研究も十分に考慮する必要がある。

最後に、CP 領域での議論は vP 領域での妥当性を検証しなければならない。CP と vP は両者とも、統語派生の中心となるフェーズを構成すると仮定されており、両者は理論上はかなり似た振る舞いをする事が予測される。このため、CP 領域での妥当性を vP 領域で検討する作業が必要となる。

4. 研究成果

(1) 本研究の第 1 の成果として、一致操作と意味の関係が挙げられる。生成文法の極小主義プログラムの枠組みにおいては、移動操作と一致操作の 2 つの操作が基本的操作として仮定されている。ここで生じる問題は、なぜ移動操作だけではなく、複数存在するのかという点である。第 1 の研究成果として、移動操作だけではなく、一致操作が必要である理由を論じている。

まず、一致操作は多くの場合、名詞句とある主要部の間の関係であると考えられてきた。しかし、その後、一致操作の役割が拡大され、名詞句と名詞句の関係を捉えるためにも有益であることが示されている。例えば、PRO の解釈や再帰代名詞の解釈を決定するために一致操作が使われている。

このよう背景を考えれば、A 移動であれ、A' 移動であれ、移動だけではなく、一致操作により、従来の「痕跡」が認可される事例があると予測される。ここで示される研究成果として、この予測が実際に適切であることが示される。これにより一致操作が必要とされることが言語資料を通し、裏付けられることになる。

この点に対する 1 つ目の証拠は、一致操作による A' 移動した後に生じる痕跡・コピーの認可に関わる現象である。移動現象は通常は島の効果を示し、島の領域から移動されると文法性が低下する。しかし、島の領域から移動しているにもかかわらず、文法的な現象が存在する。その場合、一致操作により認可されると考えられる。このため、このような現象を生成するため、一致操作が必要であると言える。さらに、A 移動であれ、移動をせず、一致操作により認可される A' 移動が存在する。一致操作により認可されるため、再構築効果を示すことはない。

さらに、ここでの研究において、一致操作の必要性も示された。その必要性は、一致操作が引き起こす意味現象から論じられた。従来までの研究においては、この一致操作と意味の研究は追求されてこなかった。しかし、実際の言語現象を観察すると一致関係の結果、意味的效果を示す現象が多く観察される。例えば、格が具現化することにより、名詞句の解釈が特定される現象が多く言語で観察される。このような現象は統語操作としての一致操作の必要性を示していると言える。

この研究成果は、"Agreement Phenomena and the C-I interface"として報告されている。

(2) 第 2 の研究成果として、主語の抜き出しの現象をラベル理論の観点から説明する研究が挙げられる。従来の研究では、受け身文の主語や繰り上げ構文の主語に限り、内部からの抜き出しができ、一方で、他動詞の主語の内部からは抜き出しが出来ないと考えられてきた。Chomsky (2008) では、これを説明するため、不活性条件が提案されている。

しかし、この考えには多くの反例が存在する。第 1 に、主語の抜き出しの可否は述部がステージレベルか個体レベルかにより異なる。述部がステージレベルの場合、主語内部からの抜き出しが可能であるが、一方、個体レベル述語の場合、抜き出しが不可となる。第 2 に、動名詞が主語の位置に生じた場合は、抜き出しが可能である。第 3 に、不定詞節の主語の内部からは抜き出しが可能である。第 4 に、日本語のような一致が観察されない言語では、他動詞であれ主語内部からの抜き出しが可能である。第 5 に、ロマンス語では主語が動詞後位に位置する場合、主語内部からの抜き出しが可能である。

これらの反例を説明する理論が必要であることが示された。まず、従来の考えに対しては、名詞が φ 素性の点で完全に一致していれば、名詞句は不活性になると言い換えることが出来る。本研究では、この素性の点に着目し、名詞句が不完全な一致しか示さない場合、名詞句内部からの抜き出しが可能となるという提案がなされた。この提案により、Chomsky (2008) で提示された考えのみならず、先に示された事例に対し、説明を与えることが出来ると論じた。

さらに、この研究では、先端条件が理論上原子的なものではなく、名詞句の解釈から導くことが可能であることが論じられた。名詞句は一般的に定の名詞句と不定の名詞句に分けられ、定の名詞句の場合、元位置では解釈されないと仮定されてきた。先端条件も同様に名詞句が元位置で解釈されないことを規定している。このため、両者の間に余剰性が生じる。このように、先端条件を独立した原理として仮定せずとも、名詞句の解釈から導かれると論じた。

また、この研究により、抜き出しに関する話者間の違いを説明することが可能となった。話者間の違いは、下位の痕跡 / コピーにアクセスできる話者と出来ない話者に分けることが出来る

と論じた。しかし、これはまったく新しいというわけではない。アイスランド語の研究などにより、このような話者の違いがあることが既に報告されている。このため、抜き出しに関する話者間の違いであれ、コピーへのアクセスという大きな枠組みの中に還元できることが示された。

この研究成果は、北海道理論言語学研究会第 10 回大会「主語の特性とラベル理論」(於：旭川医科大学) 及び、日本英語学会「主語内部からの抜き出しとラベル理論」(於：横浜国立大学) で発表された。さらに、論文として“Extraction out of Subject Phrases and Labeling Theory,” というタイトルで雑誌(*JELS* 36)に掲載されている。

(3)第 3 の研究成果として、目的語の位置からの抜き出しに関する研究が挙げられる。この研究は、例外的格標示構文に対する研究を基盤としている。この構文において目的語が主節へ移動するかどうかは随意的であると考えられている。例えば、主節に移動することにより、主節を修飾する副詞節内部に生起する要素を束縛することが可能となる。さらに主節に移動した場合には、目的語内部からの抜き出しができない。一方で、埋め込み節に留まる場合には、目的語内部からの抜き出しが可能である。

この構文に対する研究を通し、ラベルの観点から説明することが可能であると示された。まず、目的語が主節へと繰り上がる場合、通常仮定されている素性継承が生じ、 v が持つ φ 素性が下位の V へと移される。この素性継承に対応し、目的語は埋め込み節から主節へと移動し、 V との一致関係に入る。この場合、この目的語は φ 素性のすべての点で V と一致関係に入る。このため、主節へ移動した際には、抜き出しが不可能となると説明される。一方、下位にとどまる場合には、 φ 素性の中でも一部の素性とのみ一致関係に入ると考えられる。なぜならば、不定詞主要部 to には人称素性のみが存在すると言われているためである。このため、主節の v から長距離の素性継承が生じる場合には、人称素性のみが移される。このため、下位の位置に留まる目的語は部分的な素性とのみ T と一致関係に入る。このため、抜き出しが容認される。

このように、抜き出しの関係とラベル付けの間に相関関係が見られる。 $\langle\varphi, \varphi\rangle$ のラベル付けに関与している名詞句は C-I インターフェースで不活性と判断され、内部からの抜き出しが認可されないが、 φ 素性の一部とだけラベル付けに関わっている名詞句の場合、不活性とは判断されない。このため、主語に対するなされた研究が目的語に対しても応用可能であることが示される。さらに、主語にも目的語にも妥当であるため、理論的な妥当性が高いことが示される。

さらに、例外的格標示構文だけではなく、使役動詞構文、知覚動詞構文、思考動詞構文も補部に非定形節を取る。これらの構文では、それぞれ異なる素性継承を持つと論じられた。使役動詞構文の場合、目的語が繰り上がることなく、下位の位置に留まる。このため、この構文では、長距離の素性継承が唯一の選択肢となる。一方、知覚動詞構文では、統語部門において、目的語が上位の位置へ繰り上げられるが、C-I インターフェースにおいては、下位の位置に再構築される。このような位置の違いは統語部門における束縛関係と C-I インターフェースにおける名詞句内部からの抜き出しにより示される。最後に、思考動詞構文の場合、統語部門であれ、C-I インターフェースであれ、常に上位の位置に存在することが示された。

いずれの場合であれ、目的語が φ 素性の点で完全に一致関係に入っている場合、抜き出しが不可となるが、一部の素性とのみ一致関係に入る場合には、内部からの抜き出しが可能となる。

さらに、この考えは結果構文、動詞・不変化詞構文、二重目的語構文にも適用可能であることが研究成果として挙げられる。

以上の研究結果は、英語学会(於：関西学院大学)「長距離素性を用いたラベル付けと名詞句内部からの抜き出し」、また、北海道理論言語学研究会(於：旭川医科大学)「ラベル理論の拡張方法」で発表された。さらに、“Labeling with Long Distance Feature Inheritance and Extraction out of Noun Phrases,” というタイトルで雑誌(*JELS* 37)に掲載されている。

(4)第 4 の研究成果として、 φ 素性のそれぞれがラベル付けに関わることを解明した研究が挙げられる。従来の研究では、 φ 素性はあたかも 1 つの統語素性として考えられてきた。このため、ラベル付けは φ を 1 つの統語的単位として扱い、要素間の一致関係の結果、 $\langle\varphi, \varphi\rangle$ となると提案された。しかし、理論的可能性として、 φ 素性を構成する個々の素性がラベル付けに参与するという可能性が挙げられる。これは従来までには提案されてこなかった新しい考えであり、部分的ラベル付けという名称を付けた。

この考えが経験的に適切であることが示される。例えば、 to 不定詞は完全な φ 素性を持つのではなく、人称素性のみを有すると考えられてきた。一方で、 to 不定詞主要部の T と対応する主語名詞句がラベル付けの関係に入った場合、結果としてどのようなラベルになるのかが、ラベル理論上問題となっていた。この研究成果が示した点は、 to 不定詞主要部 to と対応するの主語の間で一致関係が生じ、 $\{NP, T_{to}P\}$ のラベルは $\langle\text{person, person}\rangle$ となるという点である。

また、この考えは、 $there$ 構文に対しても当てはまることを論じた。 $there$ は 3 人称の素性のみを持つと考えられている。このため、 $\{there, TP\}$ の場合も同様に、 $\langle\text{person, person}\rangle$ のラベルとなる。

さらに、この CP の素性に対する考えは、 vP 領域へも拡張できることを論じた。CP と vP は両方ともフェーズとなり、両者は統語上パラレルに振る舞うことが予測されている。このため、CP 領域で部分的ラベル付けが観察されることを考慮すれば、 vP 領域であれ、類似した部分的ラベル付けが観察されると予測される。

この予測が適切であることが示された。例えば、ロマンス諸語において、目的語が移動した際、目的語が分詞と一致関係を示す。しかし、この一致は完全な形式では生じず、数・性のみでの一致を示す。これは、vP 領域内での部分的ラベル付けとなる。これは重要な点は、to 不定詞の主要部 T と同様に、主要部の素性が一部分欠如しているという点である。つまり、CP 領域であれ、vP 領域であれ、主要部の素性欠如により、部分的ラベル付けが観察されると言える。

また、there と同様に、二重目的構文における与格は3人称の素性のみを持つことが示される。このため、与格と適用句(Applicative phrase)の主要部とが一致関係には行った時、出来上がるラベルは<person, person>となる。ここでは、名詞の方が素性欠如要素となっている。

この研究成果として、従来まで追及されてこなかった部分的ラベル付けという概念を追求し、また、これにより経験的に妥当な証拠を提示したことが挙げられる。この部分的ラベル付けは CP 領域のみならず、vP 領域でも妥当であることが示される。この研究成果は、“Shared Labels and Partial Labeling”として *English Linguistics* 36 に掲載されている。

(5)第 5 の研究成果として、主要部移動の仕組みの解明と付加詞内部からの抜き出しが挙げられる。まず、主要部移動に関しては、統語部門で移動をするのか、音声化の部門で移動をするのが未解決であり、また、統語部門で移動すると考えた場合、どのような移動の仕組みとなっているのが未解決となったままであった。ここでは、主要部移動が統語部門で生じると仮定し、その移動方法として、主要部が移動した後に再度投射するという新たな提案を行った。

この主要部移動の提案により、付加詞節であれ、統語操作に関与できることになる。従来の付加詞節に対する考えは、付加詞節が固有の理由により、常に不透明な領域を形成し、付加詞の内部からの抜き出しは出来ないというものであった。しかし、この研究を通して解明された点は、付加詞節自体、また、その内部の要素であれ、統語操作に関与することが可能であるという点である。この考えが適切であることは、付加詞節内部の要素の抜き出しから論じられた。

従来の研究では、付加詞節内部からの抜き出しが不可能であると考えられてきた。しかし、抜き出しが可能である例が報告されている。このように抜き出しができる例は、付加詞節が文頭に位置するのである、文尾に位置するのである、また、vP に付加するのである、TP に付加するのである可能である。このため、付加詞内部から抜き出しができる例は文中での位置に還元することが出来ない。

本研究の成果として、付加詞の内部構造に還元できることが解明された。この研究では、付加詞節内部に時制素性や発話力素性が欠如している場合、CP は非フェーズとして振る舞うと主張された。まず、時制素性が欠如している節として不定詞が挙げられる。このような不定詞の場合、付加詞の位置に生じる場合であれ、抜き出しが可能である。このため、付加詞には時制素性が欠如しているため、抜き出しが可能であると説明することが出来る。

さらに、定形節であれ、内部からの抜き出しが可能となる。このような場合、発話の力素性が欠如している。この素性の欠如のため、これらの節では、話題化による名詞句の前置が出来ない。このため、話題化が適応できないことと、付加詞節内部からの抜き出しが可能であることに相関関係があることになる。このような相関関係はこれまでの研究では示されてこなかった新たな一般化である。

この研究成果は、北海道理論言語学研究会第 11 回大会（於：旭川医科大学）において、“An Approach to Labeling under MERGE”というタイトルで発表された。

(6) 本研究のさらなる成果として、英語学や生成文法の知識を多くの人と共有するという社会的貢献が挙げられる。生成文法を含む英語学は高度に抽象化が進み、その概念を理解するには、高度な専門知識を必要とする。このため、英語学に関する内容を理解しやすい形式で伝えることが重要である。

この目的を達成するため、2 度の機会を用い、生成文法に焦点を当て、その概念を分かりやすく伝えることを試みた。まず、日本英文学会北海道支部道北東ブロックイベント・一般講演会（於：北海道教育大学旭川校）において、「生成文法における妥当性とその帰結」というタイトルで発表を行った。この発表において、2 つ問題、(i)ラベル理論がなぜ理論的に重要であるのか、また、(ii)なぜ併合が対称的であるのかという問題を扱い、生成文法が取り組む基本的な問題を提示し、現状を説明した。この講演会には、大学の学部生だけではなく、文学、教育学を専門とする教員も参加し、幅広い分野と意見交換を行った。

この成果は、“Some Consequences of the Levels of Adequacy,” というタイトルで、専門誌 (*Studies in English Linguistics and Literature* 28) に掲載されている。

もう一つの機会として、人文社会科学系言語学講演会（於：新潟大学）において「併合操作の理論的意義と記述的有用性」というタイトルで発表を行った。この発表は人文社会科学系に所属するに新潟大学の学部生を対象に、(i)生成文法が目指す目標、(ii)生成文法と生物学の関係、(iii)生成文法の現状に関する内容を紹介した。

(7) 最後に、本研究を通し、多くの記述的成果と理論的進展を行うことが出来た。近年提案された新たな理論であるラベル理論は、今後言語学の進展を促すことが可能な有望な理論である。しかし、近年の提案であり、記述的、そして理論的な充実が必要であることが確かである。本研究では、この両面に貢献することが出来たということが大きな成果と言える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Satoru, Kanno	4. 巻 32
2. 論文標題 Agreement Phenomena and the C-I Interface	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Explorations in English Linguistics	6. 最初と最後の頁 1-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Satoru, Kanno	4. 巻 28
2. 論文標題 Some Consequences of the Levels of Adequacy	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Studies in English Linguistics and Literature	6. 最初と最後の頁 159-172
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Satoru, Kanno	4. 巻 36
2. 論文標題 Extraction out of Subject Phrases and Labeling Theory	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 JELS	6. 最初と最後の頁 38-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Satoru, Kanno	4. 巻 37
2. 論文標題 Labeling with Long Distacen Feature Inheritance and Extraction out of Noun Phrases	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 JELS	6. 最初と最後の頁 52-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Satoru, Kanno	4. 巻 36
2. 論文標題 Shared Labels and Partial Labeling	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 English Linguistics	6. 最初と最後の頁 227-262
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 菅野悟
2. 発表標題 主語内部からの抜き出しとラベル理論
3. 学会等名 日本英語学会第36回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 菅野悟
2. 発表標題 ラベル理論の拡張方法
3. 学会等名 北海道理論言語学研究会第11回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 菅野 悟
2. 発表標題 生成文法における妥当性とその帰結
3. 学会等名 日本英文学会北海道支部道北東ブロックイベント・一般講演会、北海道教育大学旭川校
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 菅野 悟
2. 発表標題 主語の特性とラベル理論
3. 学会等名 北海道理論言語学研究会第10回大会、北見工業大学
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 菅野 悟
2. 発表標題 併合操作の理論的意義と記述的有用性
3. 学会等名 人文社会学系言語学講演会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 菅野 悟
2. 発表標題 長距離素性継承を用いたラベル付けと名詞句内部からの抜き出し
3. 学会等名 日本英語学会第37回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----